

歳月

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/3820

歳 月

徳 本 伸 一

江藤新平の境涯をテーマとした司馬遼太郎さんの小説に「歳月」という作品があり、本稿はこれと標題を同じくしてしまいましたが、ここでは単に「月日の経つのは早いものだ」という誰しもが抱く、ごく平凡な感慨を込めた普通名詞として用いておりますので、ご了承下さい。

私が、金沢大学に赴任したのは昭和四四年（一九六九年）の秋のことでした。十歳まで金沢におりましたので、全く知らない土地ではありませんでしたが、北関東の群馬（吾妻郡）、東北の仙台と経てきた後の北陸金沢の地は、しつとりと落ち着いたたずまいで迎えてくれたように思いました。

赴任当時、学部は、法文学部とっており、哲・史・文・法・経の五学科の内の法学科に所属したわけです。法学科の学生数は、一学年百名で、教員（当時は教官）も十数名程度のごくこじんまりした構成でした。当時、キャンパスは城内にあり、校舎はおんぼろ（？）でしたが、環境は抜群でした。

私は、まだ二十代の後半（二七歳）で、学生からみれば兄貴といったところでした。初めてのゼミでは、どう、こんなこと知っている？と学生側から試してみるような空気も感じられ、仕舞いには当方の存在などはそつちのけでゼミ生同士で議論を始め、一人が黒板で説明させてくれ、といって前に進み出ると、それを聴いていた他のゼミ生がさらに反駁を加える、といった具合で、とにかく口角泡を飛ばす、という状況だったのを覚えています。現在の〇弁護士や、S弁護士などが、その時のメンバーでした。以来、毎年ゼミを担当していますが、あの始めて

のゼミのことは、いまでも忘れ難い思い出の一つになっています。

私的なことになりますが、当時の私は、真っ黒な髪の毛を「プイプイいわせていた」（松山千春の表現）ものでした。それが、三十代後半あたりからにわかになくなり始め、遂には「雪が積もったようだ」（〇元教員）などと言われるようになり、そのまま今日に至っています。

それはさておき、この間に、経済学部では林さん、小林さんと定年を待たずに逝ってしまう人が出て、同年輩の一人としては大変ショックを受けたものでした。

そのショックを乗り越え、どうにか定年の日を迎えることができましたのは、皆さまに温かく支えてもらったお蔭と心から感謝いたしているところです。

一応、大学院と学部での講義、ゼミなど、果たすべき義務は果たしてきたつもりですが、体力的にも大分きつくなってきたっており、加えてこのところの時代の（そして大学そのものの）急激な変化に対応してゆくことがだんだん難しくなってきたいて、定年というのは、こういうことも考慮にいれた制度なのか、というそれなりの納得感もあります。

ともあれ、今後のあれこれは、すべて現役の方々にお任せすることにして、私としては、四月以降は、持ち上がりのゼミ生（四年生）のゼミに限って、週一回、大学に通わせてもらうことにしています。

引き続き金沢に住んで、人生の第四楽章を充実したのにしたいと思っておりますので、相変わらずのご交誼をどうぞよろしくお願いいたします。